

新樹の蔭に佇みて

雨 峰 生

若葉銀杏のさまみれば
ゆわみせしかと思ふまで
濃き緑葉のしたゝりて
色衣手を染めんとす

うれしきはこの木下かな
苔の蒸したる碑は
かつては世にも新墓の
それと涙のそゝがれて

思出つらき目標と
知られしあともかすかにて
今は無縁の石文に

ふりむく人もたえはてぬ

たゞ年毎に一もとの
銀杏ぞ春の初めより
塚をば守る人のごと
かへぬ姿を示しける

人移りゆき星變り
昨日みし世は今日ならず
仇なるえにし浮雲の
世の真相をばさみゆきて

初夏のいまことさらに
笑みを湛えて塚まもる
新樹の銀杏いき〜と

情をこめて茂るかや

石文汝よねかはくは

雨風ふきて幾とせを

ねむりて狭く暮すとも

銀杏のふかき情には

千代萬世も變りなく

やすく此の世を送れがし

朽ちて竈の灰となり

煙りと消ゆる其迄に

友に答へて

君かつれなきことの葉を

さくたび毎に言葉なし

そは何故と云ひわかす
狭き胸をば痛めつゝ

例へばうすき皮はぎて

造りいてたる鼓かな

強く撲なば破やせん

弱くは響わかざらむ

生れしえにしかへりみば

幸なきわれとなかんかな

頬に笑みをばつくれとも

衣うつくしくかざれとも

さかなき人のさけすみて

語るをさけばわか胸の